

## 症例報告

## 母子心中の1例

## うつ病者の2次妄想が犯行に関与したと考えられた症例

小林 一 弘\*

## はじめに

今回、われわれはうつ病と診断した母子心中の1例を経験した。親子心中の研究は、大原<sup>7,8)</sup>、藍沢<sup>1)</sup>、稲村<sup>2)</sup>の著作、論文を始めとして数多くの研究報告や、作田<sup>3)</sup>の統計的処理を中心とした論文も認められる。一方、古くからうつ病と犯罪との親和性も強調され<sup>5)</sup>、拡大自殺や家族殺人、間接自殺が行われやすく、拡大自殺の多くは無理心中である<sup>3,7,8)</sup>。今回、われわれが経験した親子心中には、自己の罪責感とともに、関係・被害妄想が認められた。そして、「愛する自分の子供を失う」恐怖が犯行の主な要因となったもので、これはうつ病の2次妄想の一つであると考えられた。そして、その背後には殺害することによって初めて完全に自分のものにできるという心理が働いたものと推測された。そこで、今回は、事件に至った経緯と、心理について若干の考察を加えて報告した。

## 1. 症 例

症例：A子41歳・女性 無職

家族歴：A子は、6人同胞の第4子として出生した。離婚歴があり、前夫（死別）との間に19歳と16歳の2人の娘をもうけている。また、内縁のB夫との間に、今回の被害者となった男児C（犯行時、2歳）を出産した。家族及び親族に、精神疾患の遺伝負因は認められない。また、犯罪者も

認められない。

既往歴：特記すべきものなし

生活歴および事件の概要：出生時の詳細は不明であるが、幼少児期に重篤な疾患、外傷の既往は認められない。運動能力等の発達にも特に遅れは認められない。家業は兼業農家で、一家総出で農業を営むかたわら、父親は土建社の日雇い労働者として働いていた。父親は神経質で無口、小心な性格であった。逆に、母親は勝気なしっかり者で、A子は母親によくなついていたという。また、A子は幼小児期から明朗、活発であったが落ち着きがなく、小学校時代、中学校時代を通じて、学業成績は下位であった。中学を卒業した後は、織布会社に住み込みで就職したが約2年で退職。その後、実家に帰り、家業の農業を手伝ったり、アルバイトで食堂の店員をしたりのおくった。

21歳、見合給婚。平穏な家庭生活であったが、A子が32歳の時、前夫が脾臓癌を患い入院した。約3か月にわたった入院のため費用がかさみ、金融業者から10万円を借りた。その後、前夫は死亡。A子の手元には600万円の保険金が手に入り、入院費と借金をすべて支払っても約550万円が手元に残った。その後は、夫を亡くした淋しさと思いもよらぬ大金を手にしたことから、毎日のようにパチンコ店、飲食店などを遊び歩くようになった。同時に、部品工場に工員として約1年勤めたが、「つらい仕事をしなくても遊んで暮らせる」と考え仕事に身が入らず、自ら退職した。その後は、水商売をしたり、繁華街を遊び歩いたりの日々であった。

\*岩屋病院（豊橋市）

34歳の頃、スナックで、運送会社のトラック運転手をしていたB夫（当時27歳）と知り合い、その日のうちに性交渉をもった。そして、連夜2人でスナックやホテルを遊び歩くようになった。そのため、貯金は約2年で遣いはたしてしまい、生活資金にも困るようになった。しかし、真面目に働く気にもなれなかった。そのため、B夫には内密に金融業者から借金をするようになった。

その後、B夫との間にCをもうけ、B夫とA子はA子のアパートで同居生活をおくるようになった。この頃すでに、A子には約100万円の借金があった。

次第に、A子は「B夫に借金がばれたら家を出ていかれてしまう」、「今、B夫に出ていかれたら生活できなくなる」と、悩むようになり、睡眠障害（入眠困難、早朝覚醒）が出現した。翌年、人工妊娠中絶をうけた後、「私とB夫とは歳が離れているから私に飽きてしまうかもしれない」と悲観的に考えるようになった。まもなく、B夫に対して嫉妬妄想をもつようになった。「あんたは浮気をしている。ちゃんと見ている人もいる」、「隣の奥さんと浮気をしている」といってB夫を責めたり、B夫の会社のタイム・カードを調べたりすることがあった。そのため、口論が絶えなくなり、抑うつ気分、全身倦怠感を自覚するようになった。また、B夫も精神的にまいってしまい、B夫はアパートを出て、自宅から会社に通勤するようになった。この時、「お前みたいな奴のところにCをおいていくのは心配で仕方ない。そのうち連れていくぞ」と言われた。A子はそれに強いショックをうけ、その言葉が頭からはなれないようになった。そして、うつ状態はさらに増悪、意欲低下、焦燥感、思考制止、希死念慮が出現した。また、動悸、突然の発汗、熱感等の自律神経症状も出現した。近所づきあいは極端に減少し、焦燥感のために普段は飲まないビールを飲んで気を紛らすことがあった。

また、他人が信じられなくなり、近所に散歩にでる時にも家のありとあらゆる場所の鍵をかけるようになった。3か月の後、B夫はA子の娘の説

得に応じてA子宅にもどった。しかし、A子のうつ状態は軽快しなかった。また、「今度はB夫が子供をつれて出ていってしまうのではないか」という不安を持った。そして、次第にその気持ちは確信になった。また、「金融業者も子供を狙っている」と考えるようになった。

犯行当日も、A子は「愛する子供だけは誰にも渡したくない」という考え、焦燥感にさいなまれた。また、B夫が家を出たときに言った「子供は連れて行く」という言葉が気にかかり、B夫や金融業者が子供を連れていくのではないかという不安におびえていた。午後0時頃、子供が遊んでいた積み木が「ゴト」という音がして崩れた。A子は「ゴドウという名前の人物が子供を連れていく」と思った。午後1時頃、突然、実子殺害を思い立ち、自宅6畳間の布団の上で遊んでいたCの頸部を両手で絞め、さらにかげ布団を鼻孔と口に押し当てて窒息死させた。その後、風呂場に行き、カミソリで自らの手首を切ったが、死に切れなかった。そして、午後4時45分頃、警察に自ら電話をかけ、駆けつけた警察官に逮捕された。

逮捕後、事情聴取には素直に答え、犯行を認めた。しかし、約1週間後から次第に、質問に回答しなくなり、昏迷状態になった。しかし、数日後には、少量の食事は摂取可能になった。その2日後におこなわれた検事の取り調べでは、A子は質問にはほとんど回答なく、下を向いたままであった。しかし、検事が傷を見せて欲しいと述べると黙ったまま左手首を机の上に差し出した。

#### 診察時所見

診察時には、表情に乏しく、下向きかげんで目を合わせることはほとんどなかった。また、言葉数も少なく、ほとんど聞き取れるかどうかの小さな声で応答した。幻覚・妄想はすべて否定し、不穏、興奮状態は認められなかった。身長149.9cm。体重45.0kg。血圧は126/72。脈拍は96（正）。右利きで、握力は右20.0kg、左16.0kgであった。視力が弱いようであったが、視力検査は施行していない。その他、簡易神経学的検査で異常所見は認められなかった。また、左手首には浅いwrist cut

痕が認められた。ためらい傷はなかった。家族の証言では、うつ状態を呈する以前のA子は、知能が劣っているようには見えず、通常の家庭生活をおくっていたという。

#### 検査所見

脳波検査：基礎律動は9 Hz～9.5 Hz、5～90  $\mu$  Vの $\alpha$ 波が両側後頭部優位に出現した。また、後頭部に2～3 Hz、70  $\mu$  Vの $\delta$ 波が出現。全般性あるいは前頭部優位に3～4 Hz、140  $\mu$  Vの $\delta$ 群発を認めた。光刺激では著変は認められなかった。過呼吸による賦活法では、後半で3～4 Hz、150  $\mu$  Vの $\delta$ 波が全般性に出現。回復は不良であった。トリクロロール (20ml/45kg) を用いた睡眠賦活法では、2～5 Hz、150～200  $\mu$  Vの徐波が出現。前頭部優位に2 Hz、150  $\mu$  Vの $\delta$ 波と、7～8 Hz、50  $\mu$  Vの $\theta$ 波がみられた。

矢田部・ギルフォード性格検査：E'型で、劣等感、非協動的、非活動的、社会的内向の尺度が目立った。

ロールシャッハ・テスト：反応の明細化は漠然としているものが多く、判断力の不足が疑われた。感情面では極端な内向型の体験型を示して、感情抑制的な対応をしようとしているものと思われた。全体的にみて、思考・認知には重篤な障害は認められないが、ストレス下では感情に左右された判断をしやすく、負荷が強くなると攻撃性が表面化しやすいなど情緒面での不安定さが目立った。

文章完成テスト：文章構成能力が低く、視野の狭窄が認められた。また、自己に対する否定的感情が認められた。家族に対しては依存欲求が強く、社会に対しては疎外感が目立った。

絵画欲求不満テスト：欲求不満場面で不適切な解答が多く、場面認知にかなりの不足が認められた。また、反応の転移が多く、対応に一貫性がなかった。

クレペリン作業能力検査：C' fで、作業能力の極端な不足が認められた。また、疲労回復能力にも乏しかった。

WAIS知能検査：言語性検査；粗点20、I.Q.60以

下（評価可能範囲以下）。動作性検査；粗点18、I.Q.60以下、全検査評価点総計；粗点38、I.Q.60以下（評価可能範囲以下）。

## 2. 考 察

母子心中を企てたが、母親だけが生き残り逮捕された41歳の女性例を報告した。

#### 犯行時の精神状態について

A子は、抑うつ気分、意欲低下、全身倦怠感等を自覚していたが、B夫が家を出てから、症状はさらに増悪した。不眠・焦燥のために日中からビールを飲んだり、関係・被害妄想から家に閉じこもり対人関係を避けるようになった。また、全身の倦怠感から臥床傾向となり、動悸、発汗などの自律神経症状も認められた。また、拘留中には昏迷状態～亜昏迷状態を思わせる状態を呈している。これらは、重症のうつ病を想像させる。

A子のもった関係・被害妄想は「子供を奪われる」恐怖を主題として発展したようである。そこで、性格的要因、状況要因、心理的要因からうつ病の発症と妄想内容の発展について考察を加えた。

#### 性格的要因

A子の性格は、生来、むら気で大胆であり、物事をあまり考えないで行動する傾向があったようである。最初の夫を亡くし多額の保険金を入手した時も、得た金銭を計画的に使用することはなく、無計画に思いのまま浪費した。そして、その後は金融業者から借金をして、その場しのぎをするといった行為をくり返していた。職業も転々としている。つまり、困った時には辛苦を味わいながら、危機的状況が過ぎると何事もなかったようにけろりと忘れていく。このような性格は、決して不真面目ではないが、安定性を欠いておりKretschmerのいう循環気質と考えることができる。言うまでもなく、この性格は操うつ病と親和性があり、A子のうつ病の惹起に関与した可能性も大きいと考えられる。

#### 状況的要因

経済苦が心中の直接原因になることは多い<sup>7,8)</sup>。

しかし、これらの多くが、その実行時には何らかのうつ状態を呈していることが指摘されている。Cが誕生した頃には、A子はすでに金銭のやりくりにおわれ、次第に抑うつ気分、全身の倦怠感が生じている。金融業者に借金の返済を迫られるようになるとうつ状態は次第に増悪している。このように、経済苦が大きな状況要因となったのは確かなようである。しかも、その苦しみを相談する相手の欠如が問題になったことは想像に難くない。つまり、借金の返済について、孤立無援で一人悩み苦しんだことが、A子のうつ病をさらに増悪させたと思われる。また、人工妊娠中絶をうけ体調をくずすと、抑うつ気分、意欲低下、不眠、焦燥に加え、夫に対する嫉妬妄想、周囲の者に対する関係・被害妄想も生じるまでに至っている。

#### 心理的要因

うつ病の2次妄想には、心気妄想、罪責妄想、貧困妄想などがよく知られているが、関係・被害妄想が生じることも稀ではなくその一つとして「子供を奪われる」という妄想が発展したと思われる。これは、A子がおかれた状況下での心理を考えれば理解は可能である。A子とB夫はしばしば夫婦喧嘩をくり返し、B夫が出ていく際には、「お前みたいな奴のところにCをおいていくのは心配で仕方ない。そのうち連れていくぞ」と言われている。このような対象喪失の危機状況が、妄想主題の形成に関与した直接の原因となったと考えられる。また、さらには金融業者から再三の借金返済の催促をうけて、Cをつれさる者はB夫から金融業者全般に拡大したと思われる。このように、Cをめぐる関係においては、B夫はA子の味方ではなく敵対者であった。これは、生活共同体としての夫婦のもつ婚姻という重要な部分の欠如も影響をもたらしていると考えられる。また、このような状態で、「子供だけは失いたくなかった」A子は、子供を殺害することによって初めて「最愛の我が子」を誰にも奪われないものにすることができたと考えられる。つまり、A子がおかれた状況では、対象喪失の恐怖を完全に取り去るためには、子供の「所有」を確固とした「独占」にま

で高めるか、逆に所有対象を抹殺することにより他者の手による略奪の可能性を減してしまうかといった二者択一が迫られたものと考えられる。これは、妄想の主題形成に関与したと考えられる。Mende<sup>4)</sup>の報告している、うつ病者が失恋による反応性のうつ状態で相手の女性を自動車でひき殺そうとした症例や、愛の確認が得られなかったために絞殺した症例にも認められる。また、家族としての本質的条件として強固な「結合状態」あるいは「所有」があげられ、うつ病者を考える時にはその家族内力動が重要となってくるが<sup>6)</sup>、本症例の場合、「母-子」と「父-子」の間に同時に二重にでき上がり、それが対立した末での犯罪ということもできよう。

#### 知能が関与した可能性

WAIS知能検査の結果によると、知能程度はかなり低い結果になっている。クレペリン作業能力検査においても、作業能力の極端な不足が認められた。また、絵画欲求不満テストでは、場面認知にかなりの問題が認められるなど、A子は知的レベルにかなりの問題をかかえているのではないかと疑われた。脳波所見も未熟または精神遅滞を疑わせる。しかし、家族による話では日常生活に支障をきたすことはなく、知能が低いという印象もなかったという。これを考えると、診察時まで持続していた重度のうつ状態に心理検査が影響された結果、知能が落ちているようにみられたと考えるべきだと思われる。また、A子が、「子供が遊んでいた積み木がゴトという音がして崩れた時、ゴドウという名前の人物が子供を連れていくという気がした」と供述しているのは、うつ状態における抑制または軽度意識障害によって柔軟な思考能力が低下し、被暗示性が亢進したためだと考えられるが、これもうつ状態の重篤さを伺わせる。そのため、犯罪を、知能程度と直接的に関連づけることは困難であると思われた。つまり、軽度の精神遅滞が存在する可能性があるが、A子程度の知能があれば、状況の是非の弁別能力に困難はきたさないと考えられた。

## まとめ

1) 本症例の犯行時の精神状態は重症のうつ状態と考えられ、抑うつ気分、意欲低下、不眠、焦燥などの他に、被害妄想などが認められた。さらに、犯行時には軽度の意識障害の合併が疑われた。

2) 関係・被害妄想の一つとして「子供を奪われる」という恐怖を中心とした妄想が発展したと思われた。

3) 本症例の実子殺害は対象喪失の恐怖を取り去るために、子供の「所有」を確固とした「独占」にまで高めるか、逆に所有対象を抹殺することにより他者の手による略奪の可能性を減してしまうかといった二者択一が迫られた末に、後者が選択されたものと考えられた。

4) また、本犯行は、症例がおかれた社会・経

済状況（孤立無援状態、貧困状態）からも理解することが可能であった。

## 【文 献】

- 1) 藍沢鎮雄：情死と親子心中，からだの科学 86：86-92，1979.
- 2) 稲村博：自殺学その治療と予防のために，東京大学出版会，東京，1977.
- 3) 広瀬貞夫，懸田克射編集代表：躁うつ病，現代精神医学大系24 司法精神医学，中山書店，東京，1976.
- 4) Mende,W：Zur Kriminologie depressiver verstimmungen. Nervenarzt 38：546，1967.
- 5) 中田修：うつ病と犯罪，犯罪誌 35-154，1969.
- 6) 中谷陽三：犯罪と家族，心と社会 31-41，1989.
- 7) 大原健士郎：女性の自殺，臨床精神医学 10：59-64，1981.
- 8) 大原健士郎：心中考 愛と死の病理，太陽出版，東京，1973.
- 9) 作田勉：心中の研究，犯罪誌：54-61，1989.